名古屋市博物館だより
2021.4.1
231

館蔵品から見る朝日遺跡

新収資料

# 『蓬瀛勝会』

横尾　拓真

今からおよそ200年前の寛政七年（1795）、名古屋の長福寺（七寺、現中区）にて「蓬瀛勝会」という大規模な書画会が開かれた。名古屋城下および近在のコレクターたちが、中国の書画を中心とする自慢の所蔵品を持ち寄り、一堂に展示するという空前絶後の企画であった。今回紹介する作品『蓬瀛勝会』は、その際に発行された展示品の目録であり、現代で言うところの展覧会図録のようなものである。以下、その内容をくわしく見ていきたい。

**書画会「蓬瀛勝会」について**

「蓬瀛勝会」は、目録に「社盟」として列挙される以下の人々によって企画されたと考えられる。城下および近在の豪商、豪農である神谷天遊（永楽屋伝右衛門）、山川墨湖（丸屋弥兵衛）、中村緑泉（佐野屋清左衛門）、内田蘭渚（駒屋源兵衛）、大館鶴鳴、下郷伝芳、さらに医師の小林香雪、そして伊勢国長島藩に仕えた儒者の十時梅厓、以上の計八名である。彼らのコレクションが、本会の展示品の中心となった。

十八世紀の後半には、政治的安定と経済的発展を背景として、書画を愛好する好事家たちが出現し、古今の名品を展観する、あるいは当代の作家が新作を披露する書画会が各地で開催されるようになった。その中でも本会は、出品目録が現存しており、規模や様子がよく分かるという点で注目すべき事例である。目録から理解できる出品作品の分量の多さ、内容の幅広さは、当時の名古屋の文化的豊かさを証明するものであろう。中国の書画ばかりでなく、室町時代の周文や明兆、「畸病巻軸」（現京都国立博物館蔵　関戸家本「病草紙」か）といった興味深い作品も確認できる。もちろん実際には、大坂の人物である十時梅厓（1749～1804）が企画を主導したと思われるが、展示品の多くは当時の名古屋に存在したものなのである。

（次ページへ→）

新収資料　蓬瀛勝会

中條勇次郎の
八角合長掛時計

名古屋市博物館だより 231 号
令和３年(2021) ４月１日
年２回(10 月、４月)発行

編集・発行／名古屋市博物館
〒467-0806
名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1
TEL　052-853-2655
FAX　052-853-3636
http://www.museum.city.nagoya.jp

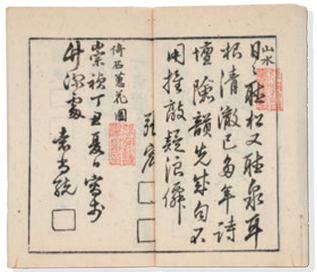
古紙を含む再生紙使用

**目録『蓬瀛勝会』の特徴**

小本二冊から成る本目録は、一般的な袋綴じではなく、糸を使用せずに糊付けで製本する結葉装の装丁である。刊記は見当たらないため、書画会の関係者だけに配られた、ごく少部数の目録だったようだ。（注）

本目録の最大の特徴は、展示品の名称だけでなく、画賛や題字、落款の署名を写し取って掲出している点である。加えて所蔵者を示す鑑蔵印を捺す点も注目される。すなわち出品作品の内容がある程度分かるとともに、当時の所蔵者も判明する点が貴重なのである。例えば、本会の名称「蓬瀛勝会」は、中国明代の文人・龔勉が揮毫した雄渾な題字「蓬瀛勝会」（書額作品であろうか）に基づくということが収録内容から窺うことができる（図版1）。加えて、頁上には「鳴海平氏清玩」（朱文楕円印）が捺されており、鳴海宿（現緑区）の豪商・下郷伝芳（1762～1819）の所蔵品であったということも分かるのである。

図版１　『蓬瀛勝会』　館蔵



図版２　『蓬瀛勝会』　館蔵
※向かって右側が張宏「山水図」の記録である。

**出品作品の具体的内容**

画賛や落款がある程度正確に写してあれば、現存する遺例のなかから「蓬瀛勝会」の展示品の特定も可能となる。特定ができれば、どのような作品が当時の名古屋に存在し、当代の作家に影響を与えたのか、照らし合わせて考えることもできよう。「社盟」の一人である神谷天遊は、名古屋出身の文人画家・中林竹洞（1776～1853）と山本梅逸（1783～1856）を庇護し、自身のコレクションを両者に学ばせたことが諸書で伝えられている。天遊のコレクションとは果たしてどのような作品であったのか、『蓬瀛勝会』から考えてみよう。

本目録における天遊の所蔵品は「張州神氏書画印」（朱文長方印）によって明示されている。その一つに、明代蘇州の画家である張宏の山水図がある。ここでは写し取られた七言絶句の画賛が手がかりとなる（図版2）。幸いなことに、「中林竹洞、竹溪関係下絵・摸写資料」の内の一枚に、同様の画賛を持つ模写資料が存在する（図版3）。賛詩の文字や書きぶりもほぼ同じであり、この模写の原本が「蓬瀛勝会」における展示品と考えてよいだろう。この模写自体は、竹洞自筆と断言できないものの、竹洞が学んだとされる天遊コレクションの具体的な図様を知ることができるのだ。このように本目録は、当時の名古屋における書画愛好の盛行ぶりを伝えるだけでなく、十九世紀以降に活躍した名古屋出身の画家たちの影響源を探る手がかりともなるのである。

図版３　筆者不明「張宏山水図模写」館蔵
（中林竹洞、竹溪関係下絵・摸写資料）

注　本目録は、二冊本の内容を抜粋して一冊にまとめた刊本が知られ、そちらには寛政七年秋、風月堂発行の刊記が確認できる。

【参考文献】
岸野俊彦「近世名古屋商人、内田蘭渚の文化世界」『名古屋芸術大学研究紀要』23、2002年3月
杉本欣久「江戸後期の「展観録」と「款録」に見られる中国書画」『古文化研究』12、2013年3月

ちゅうじょうゆうじろう
# 中條勇次郎の
はっかくあいながかけどけい
# 八角合長掛時計

鈴木　雅

現在、名古屋周辺地域は中京工業地帯と呼ばれ、ものづくりの盛んな地域として知られている。明治維新の後、社会が大きく変化する中で近代的な産業が勃興し、名古屋も近世城下町から近代産業都市へと変貌を遂げた。

近代名古屋で盛んになった新しい産業の代表的なものとして、時計製造が挙げられる。名古屋では明治期に多くの時計製造会社が設立され、愛知時計、尾張時計など大きく成長を遂げた企業も存在する。現在も時計製造を続ける企業はないが、培った技術を生かし、計器類や精密部品の製造に転身して事業を継続している企業は複数あり、名古屋のものづくりを支え続けている。

このたび、古時計の収集家・研究家として知られる戸田彦氏より、名古屋周辺地域で生産された古時計を中心とする72点の資料が寄贈された。ここでは、そのうち特に注目すべき1点を紹介しよう。

図版１　八角合長掛時計　中條勇次郎製造　林市兵衛販売　明治期
館蔵（戸田知彦収集古時計コレクション）

図版２　本体内部のムーブメント

**図版1**は、中條勇次郎（1858～99）製造の掛時計である。八角形に短い尾の付いた八角合長型で、文字盤はやや大型の12インチ。ゼンマイは八日巻で、「ボンボン」と鳴る時打ち機能も付いている。文字盤がやや変色しているが、内部のムーブメントはサビひとつ無く、ゼンマイを巻けばきちんと動作するなど、良好な保存状態にある（図版2）。中條は名古屋時計産業の先駆者として知られる人物で、彼の手による時計はこれまで博物館明治村が所蔵する1点など3点しか知られておらず、本資料が4点目の出現となる。

中條は、もともと岡崎の錺職人だったといわれている。中條本人や関係者に取材した末松謙澄によれば、明治二年（1869）、知人が『博物新編』という科学書に触発されて自宅に作った電線呼鈴に感心し、それから種々の発明に取り組むようになった。特別な教育を受けていたわけではなかったが、機械についてはひと目見れば忘れないという優れた資質を有しており、東京から運ばれてきて展示されていた蓄音機を見ただけで精巧な模造品を製作したという。岡崎のエジソンとでもいうべき天才少年の姿が想像されるだろう。しかし、掛時計の製作については明治十一年から取り組んだが3度失敗したといい、その難しさがうかがわれる。

明治四十一年の愛知県時計製造同業組合「雑書綴」（博物館明治村蔵）によれば、中條の時計開発が軌道に乗ったのは、明治十九年十月に水谷駒次郎という協力者と出会ってからのことである。水谷はもともと名古屋の木挽職人で、当時は測量機器の部品を製作していたという。水谷は明治二十年一月から中條宅に住み込んで共に開発に取り組み始めた。開発があたっては、アメリカ製の通称「大ボン」と呼ばれる12インチの掛時計を参考とし、同年五月に至り12ダースの時計を製造することができた。

（次ページへ→）

# 館蔵品から見る朝日遺跡

瀬川　貴文

令和２年 11 月 22 日、愛知県清須市に「あいち朝日遺跡ミュージアム」が新しく開館しました。朝日遺跡は、清須市と名古屋市西区にまたがる弥生時代を代表する遺跡の一つであり、その範囲は東西 1.4km、南北 0.8km と広大です。昭和 40 年代以降の国道 302 号（名古屋環状２号線）などの開発に伴う発掘調査で、弥生時代の集落周りをめぐる環濠やそこに設置された逆茂木・乱杭などの防御施設が発見されたことをはじめ、多数の住居跡や墓などが発見され、集落の様子がわかる弥生時代の大集落遺跡として全国的にも著名な遺跡となりました。その重要性から、これらの発掘調査で出土した多数の土器、銅鐸などの金属器、色とりどりの勾玉やガラス玉、精巧な木器など 2,028 点もの資料が国の重要文化財に指定されています。

あいち朝日遺跡ミュージアムでは、朝日遺跡の発掘調査からわかった弥生時代の人々の生活や活動が模型や映像で紹介され、館外の復元住居や貝塚などから遺跡を体験でき、総合的に朝日遺跡や弥生時代を感じることができる魅力的な遺跡博物館となっています。

実は、名古屋市博物館でも朝日遺跡で出土した資料を所蔵しています。朝日遺跡は元々、朝日貝塚や貝殻山、検見塚、貢ヶ島、そして二反地貝塚など複数の貝塚があると考えられていました。その後、これらが有機的なつながりがあると考えられ「朝日遺跡群」と呼称されるようになり、さらに、発掘調査の進展にともない、一つの巨大な集落遺跡であることがわかったため「朝日遺跡」と呼ばれることになりました。博物館の資料は近年の発掘調査で出土した物ではなく、行政による発掘調査の体制が整う以前に、それぞれの貝塚の位置づけを確かめようと、郷土史家や地域の考古学者らによって調査され、それぞれのもとで保管されていた資料が寄贈されたものです。その一覧を**表１**にまとめました。まず、多くの方々から資料がもたらされていることに驚かされます。当地域を代表する遺跡群として古くから注目されていたためでしょう。

例えば表１-11 の二反地貝塚出土資料は、昭和 39 年・41 年に久永春男氏を中心とした発掘調査で出土したものです。これらは、日本考古学の教科書的な書籍でもあった『日本の考古学』の東海の弥生時代を紹介する中で、弥生時代の前期から中期にわたる土器編年の基準となる資料として提示されています。

朝日遺跡をはじめこの地域の弥生時代前期の遺跡では、縄文的な様相を残す条痕文系（久永の論文では「水神平式」）の土器と、弥生時代的な西日本の影響の強い「遠賀川系」の土器が共存することが特徴とされます。久永氏は二反地一式から六式に分類し、一式はほぼ遠賀川系の土器だけであるのが、二式以降条痕文系の土器が増え、五式にいたっては約半数であるとしました。こうした現象から西からの人の移動と定着の過程を導き出しています。残念ながら、この成果は報告書等の形では刊行されず、十分に検証されたとは言えません。調査員の一人であった内山邦夫氏のもとで長らく保管されていたものが、平成 26 年に当館に寄贈されました。その数コンテナ約 200 箱と膨大な数があり今後の整理が必要です。

図版１　二反地貝塚出土資料（弥生土器）

図版２　二反地貝塚出土資料（骨角器・貝輪など）

**表１　館蔵の朝日遺跡出土資料**

| | 資料名 | 資料番号 | 時代 | 地点 | 寄贈者・コレクション | 点数 | 内容 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 寅ヶ島遺跡出土資料 | 113-65 | 弥生 | 寅ヶ島 | 廣瀬淳一 | 1888点 | 弥生土器片ほか |
| 2 | 二反地貝塚出土資料 | 113-66 | 弥生 | 二反地 | 廣瀬淳一 | 26点 | |
| 3 | 朝日遺跡群出土資料 | 120-36 | 縄文～江戸 | 朝日、貝殻山、検見塚 | 吉田富夫コレクション | 379点 | 縄文土器片、弥生土器片、土師器片、須恵器片、陶器片、石斧、砥石、獣骨、貝等 |
| 4 | 朝日遺跡群出土資料 | 120-59 | 弥生・古墳・(中世) | 朝日、貝殻山、検見塚、二反地、寅ヶ島 | 飯尾恭之コレクション | 一括 | 弥生土器片、須恵器片、土師質土器片、貝等 |
| 5 | 朝日遺跡出土資料 | 120-118 | 縄文・弥生 | 二反地 | 野村三郎コレクション | 13点 | 縄文土器片、弥生土器片、貝 |
| 6 | 朝日遺跡出土資料 | 120-129 | 弥生～江戸 | | 湯浅健二 | 691点 | 弥生土器、石鏃、石錐、剥片、獣骨、貝、須恵器、施釉陶器 |
| 7 | 朝日遺跡出土資料 | 120-143 | 弥生・奈良～鎌倉 | 検見塚、朝日 | 小栗鉄次郎コレクション | 52点 | 弥生土器片、石器片、貝、骨片、中国青磁片 |
| 8 | 朝日遺跡出土資料 | 120-190 | 弥生～古墳 | 朝日 | 奥村朝子 | 129点 | 弥生土器片、石、須恵器 |
| 9 | 朝日遺跡出土資料 | 120-218 | 縄文～江戸 | 検見塚 | 浅野秀子 | 750点 | 縄文土器片、弥生土器片、埴輪片、須恵器片 |
| 10 | 朝日遺跡出土資料 | 120-235 | 弥生～古代 | 寅ヶ島 | 松岡榮 | 466点 | 弥生土器片、須恵器片、貝 |
| 11 | 二反地貝塚出土資料 | 120-238 | 弥生 | 二反地 | 内山邦夫 | 一括 | 弥生土器片、石器、骨角器 |
| 12 | 朝日遺跡出土資料 | 120-252 | 弥生・不明 | | 森達也コレクション | 30点 | 弥生土器片、須恵器片、貝 |
| 13 | 朝日遺跡群検見塚出土資料 | 123-1 | 弥生 | 検見塚 | 江崎武 | 4点 | 骨鏃、獣骨 |
| 14 | 弥生土器片 | 123-5 | 弥生 | 検見塚 | 岡田鎮太コレクション | 27点 | 弥生土器片 |
| 15 | 弥生土器片 | 123-6 | 弥生 | 貝殻山 | 岡田鎮太コレクション | 12点 | 弥生土器片 |
| 16 | 朝日遺跡出土資料 | 123-24 | 弥生 | 朝日 | 加賀宣勝コレクション | 2点 | 弥生土器片、石片 |
| 17 | 朝日遺跡出土資料 | 123-29 | 弥生 | 朝日 | 坪井邦夫コレクション | 94点 | 弥生土器、石片、貝、砥石 |
| 18 | 朝日遺跡群出土資料 | 123-36 | 弥生 | 寅ヶ島、検見塚 | 田中朝子 | 9点 | 弥生土器片 |
| 19 | 壺片 | 123-43 | 弥生 | 貝殻山 | 山田孝雄 | 1点 | 凹線文細頸壺片 |
| 20 | 貝殻山貝塚出土資料 | 123-44 | 弥生 | 貝殻山 | 守山郷土史研究会 | 239点 | 弥生土器片、土器片、貝殻、石 |
| 21 | 勾玉 | 123-45 | 弥生 | 検見塚 | 小栗鉄次郎コレクション | 1点 | |

（次ページへ→）

図版３　磨製石斧・環石（吉田富夫コレクション）

図版４　勾玉（小栗鉄次郎コレクション）

時計を完成させた中條らは、サンプルの２点を名古屋の輸入時計商林市兵衛のもとへ持ち込み、投資の交渉をした。当初は委託販売の形で契約が結ばれたようだが、結局、林は中條らを丸ごと雇用することとし、明治二十一年一月に時盛舎という会社を設立して杉ノ町（現東区泉一・二丁目）の工場で時計製造を開始した。これが、名古屋における時計産業の始まりである（なお、文献によってこの間の年次には異同が見られる）。

明治二十年六月に林市兵衛と中條勇次郎が交わした契約書には「下女振ボンボン時計製造器械」「ボンボン時計極精品壱ヶ月ニ三百丁製造」と見えるから、中條らの時計製造が手作りの工芸品的なものではなく、大量生産を可能とする近代的な製造機械によるものだったことがわかる。この契約で、中條が林に対してこれらの機械一式を１２００円という大金で譲渡することが取り決められている。

本資料の振り子室には、製造元を示すラベルが貼られている（図版３）。そこには、「八日巻時計　製造人　愛知県岡崎連尺町　中條勇次郎　一手販売所　愛知県下名古屋本町四丁目　林市兵衛」（原表記はローマ字）と記されている。この表示に従えば、本資料は中條と林が出会って以降、時盛舎が設立される以前に製造・販売されたものということになる。まさに名古屋時計産業の黎明期を伝える産業遺産であり、大変貴重な資料といえるだろう。

図版３　振り子室に貼られたラベル

**【参考文献】**

末松謙澄「岡崎奇人中條勇次郎氏の発明品に関する話」『東洋学芸雑誌』　１１５号、１８９１年。

愛知県『愛知県史　上巻』１９１４年。

名古屋市『産業調査第三輯　時計に関する調査』１９２４年。

吉田浅一編『名古屋時計業界沿革史』商工界、１９５３年。

博物館明治村編『改暦１２０年記念　時と時計展』名古屋鉄道、１９９３年。

戸田如彦『アンティーク掛時計』トンボ出版、２００１年。

戸田如彦・矢野睦巳・日本古時計保存協会『日本の古時計01　中條勇次郎製造の時計』チロルハウス、２０１４年（２０１６年修正）。

表１-４は、やや時代が下った昭和 46 年頃に飯尾恭之氏によって採集された土器片群です。朝日遺跡内の各地点の貝塚で採集されたことが記録されています。飯尾氏をはじめ多くの郷土の考古学者が、朝日遺跡内で開発が行なわれるのを目の当たりにして、この遺跡の重要性を訴えかけました。その活動の痕跡ともいえる資料群です。

現在の朝日遺跡の重要な発掘調査の成果は昭和 40 年以降によるところが大きいのは確かです。しかし、名古屋市博物館の資料からみたように、それ以前の郷土史家や考古学者の方々の努力により、様々な形で資料や記録が残され、遺跡の重要性が伝えられたからこそ、開発に伴う大規模な発掘調査がなされたとも言えます。

名古屋市博物館の朝日遺跡の資料は、各地点でどういったものが出土したかを記録した標本であり、弥生時代を中心とする時代の歴史を知ることができる歴史資料であることはもちろん、近代における遺跡の発見と調査の歴史を語る資料としても意味を持つのです。

**【参考文献】**

久永春男　1966 「弥生文化の発展と地域性―東海―」『日本の考古学』Ⅱ：pp162-169　河出書房新社

飯尾恭之　1971 『朝日遺跡群の土器―愛知県清洲町揚水土地改良事業による遺跡破壊の記録』　朝日遺跡保存会